



# 目撃者

名探偵・神津恭介

高木彬光

光風社出版



目撃者

定価 1000円

昭和59年9月30日 発行

著者 高木彬光

発行者 深見兵吉

本文印刷 誠宏印刷  
カバー印刷 大平舎美術印刷  
製本 越後堂製本

発行所 光風社出版

〒112 東京都文京区関口1-32-4  
電話(03)204-2441 振替東京8-12913

ISBN4-87519-437-4

## 「神津恭介シリーズ」発刊によせて

高木彬光

この度、神津恭介の全著作が、光風社出版から発刊されることになった。顧みて無限の感慨にたえない次第である。思えば、昭和二十三年、生れて初めて探偵小説の筆をとった時、私の起用した名探偵役がこの人物だった。

当時の私の理想像である。

女のような美青年、しかも語学と数学にかけては天才的な頭脳を持ち、女ざらいで事件をひきうけた当時独身で通していた。

まるで現実の私とは、正反対の性格で、今ふりかえてみると、苦笑を禁じ得ないのだが、山田風太郎君にいわせると、名探偵の性格には作者の正反対のものがあらわれるというのである。だからこの点はお許しいただくことにして、私の考えたことは、彼と私と同年代の人間として終始させようとしたことだった。この点ではまず成功したのではないかと思っている。

それに従えば、彼は既に停年を通りこし、東大からも引退し、今は悠々自適の境に入っているはずである。その後、彼はどのような状況におかれ、いかなる境地に達したか、それについて若干の筆をついやすことが、私に課せられた次の課題といふべきだろう。



目次

第一話	殺人シーン本番	七
第二話	死美人劇場	一〇一
第三話	幽霊の顔	一三九
第四話	これが法律だ	一六六
第五話	加害妄想狂	一九三
第六話	性痴	二二七
第七話	鏡の部屋	二五一
第八話	目撃者	二七五

装幀 玉井ヒロテル

目  
擊  
者





## 第一話 殺人シーン本番

### 殺人への招待

探偵作家の松下研三は、はしごはしごの連続で、午前三時ごろ御帰館あそばしたあげく、正午ごろまで、うつらうつらと惰眠をむさぼっていた。

「あなた、電話よ、電話ですったら」

妻の滋子しげこがゆすぶり起し始めたのにも、

「うるさいな、小説家の家に昼前に電話をかける馬鹿があるか。電話ならお前が出るよ」といって、蒲団を頭からかぶってしまったが、

「わたしじゃ駄目なのよ。日東映画の社長秘書という人からぜひあなたにお話ししたいことがあるって」

「日東映画？」

研三はあわててねぼけ眼をこすりながら、

「おれの小説の映画化の話か？」

「何だか知らないわ。でも、映画会社の話ならきくとそんなところよ。早く起きてよ」

研三もあわてふためいて飛び起きた。

「もしもし、こちらは松下研三ですが……」

電話機をつかんで、ねぼけ声でいうと、

「松下先生でいらっしやいますか。私は日東映画社長秘書の竹沢雅彦でございますが……」  
と、きびきびした男の声が伝わって来た。

「はあ、それで、御用件は？」

「実は、社長が今夜、先生を自宅へお招きしたいと申しますので、御都合を……」

「え？」

松下研三の睡気ねむけは完全に吹っ飛んでしまった。小説の映画化の交渉に、社長自身が直々じきじきに、自宅へ呼んで依頼するなどということは、およそ例のないことなのだ。

「今夜は……別に予定はありませんが、何の御用なのですか？」

「先生の作品の映画化の話だと思えますが、ほかに社長から直々、何かのお願いがあるそうです。私は、くわしい話は聞いておりませんが……」

松下研三は、いよいよもって、呆気あっけに取られてしまった。今まで一面識もない日東映画の社長が、小説の映画化のほかに、いったい自分に何の話があるというのだろうか？

「なるほど……では、ともかく、今晚お訪ねすることにいたしましょう。何時ごろがよろしいのですか？」

「はあ、こちらの都合で少し遅くなりますが、八時ごろ、車をお迎えにさし出しますから、それでどうぞ……お忙しいところを、どうも恐縮でございますが、どうかよろしくお願いします。では御

免下さい」

そういうと、相手は電話を切った。

「はてな、これはいったい何事だろう？ ひょっとしたら、おれを専務に迎えたい——なんていう話じゃないのかな？」

研三は勝手なことをいいながらも、首をひねったが、そばの滋子はぶっと吹き出して、

「あなたを専務なんかにしたら、会社は赤字赤字で潰れちゃうわよ」

「しかし、日東映画社長の金原源造は映画界の風雲児、怪物などと呼ばれているような男だからな。思い切ったことをどんだんやるから、案外、おれを見こんで……そういえば、この間、ある易者が、おれはあと一年半で探偵作家の足を洗って、いずれは映画会社の重役になるといっていたぞ」

「また、いつもの神がかりが始まったのね」

滋子は天をあおいで慨歎した。

「やっぱり小説の映画化の話でしょう。日東映画というのは金原社長のワンマン会社なんだそうだから、それで社長さん自身が、直接話そうっていうんじゃない？」

「だけど、ほかに何か——っていつてたぜ。その何かというのが曲者だ」

「まあ、今晚行ってみればわかることだわ。今から、そんなに、そわそわすることはしないでしょ」

「そわそわしているんじゃないよ。こんな話を聞いたおかげで、急に腹が減って来たんだ。朝飯——いや、もう昼飯か。とにかく早く頼むよ」

「御飯が喉を通るかしら？」

滋子は笑って台所の方へ去った。

しかし、研三はその日は夕方まで、全然仕事が手につかなかった。

一年半で転業するという、易者の言葉はまだ半信半疑だったが、一介の作家にすぎない彼に、社長自身が直々にあいたいといひ出したことは、ただごととは思えなかった。

研三は、今まで金原源造については、週刊誌のゴシップ程度のことしか知らなかった。ほとんど破産寸前だった、おんぼろ会社の日東映画を、またたく間に大会社に育て上げた人物で、金をかけない話題作を次々に放つ企画の勤のよさでは、有名なものだということと、そして、妻運が悪くて、何度も妻を失い、二年ほど前に、親子ほど年の違ひ、自分の会社のスターだった白坂ナオミと結婚して、話題をふりまいたことぐらいが、研三の知っていることのすべてだった。

「とにかく、奴さんやつさんのことだから、何を考へているかわかりゃしない。まさか、おれをスターになどとはいひ出さんだろうが……」

研三は、一日中、そんなひとりごとをぶつぶつとつぶやいていた。

迎えに来た五七年型クライスラーに乗って、麻布あさかの金原邸を訪れた研三は、まずホテルのような豪壮な邸宅の外観に眼を見た。

迎えに来てここまで同乗して来た企画課の青年にあわてて聞いてみると、この建物は、日高宮ひたかのみやの旧邸だったということだった。それが、戦後の混乱時代に、財産税その他の関係で人手に渡り、新興財閥や第三国人の手を経て、三年ほど前に金原源造の手に落ちたのだということだった。

研三の家ぐらいすっぽり入ってしまふような、贅沢な応接間に通されて、研三は落着きなくあたりをきよろきよろ見まわした。

壁にかかっている、奇妙な絵は、どうやらピカソのものらしかった。

天井からは、豪華なシャンデリアが下っていた。研三は何かの記事で、このシャンデリアが古事来歴つきの、時価数百万円という代物だということを読んだ記憶があった。

そこへ、ドアを開けて、六十歳ぐらいの、がっしりした精力的な体格の男が、羽織姿であらわれた。頭は禿げてしまっているが、血色のよい顔で、まだまだ男ざかりといった感じだった。その後から、三十五、六の背広姿の男が入って来たが、顔つきも体つきもよく似ているし、もう頭の毛が薄くなっているところを見ても、この二人は金原社長親子に違いなかった。

「いやあ、先生、お忙しいところをどうも……こちらは私の倅こがれで、総一と申しましてな、わが社のプロデューサーをやっておりますが……」

初対面の挨拶が終ると、お仕着せの市松模様の着物を着た女中が二人、色とりどりの料理や、何本もの酒瓶を運んで来た。

「先生はお酒がお好きかどうかはございましたので、本当ならお茶から差上げるはずなのですが、省略させていただきますまして、さっそくですが、どうぞお一つ……」

総一は如才なく研三にすすめた。

「先生、ウイスキーは何がお好きでしょうか。どうぞ、お好みのものを……」

思いがけない歓待にあつて、研三はいくらか薄気味悪くなつて来た。しかし、もともと酒には眼がない方だから、本物のジョニー・ウォーカーや、ヘーグ・アンド・ヘーグなどを眼の前に並べられては、顔の筋肉も次第にふやけていった。

「さすがに、御立派なお宅で……」

研三も一応儀礼的なせりふを並べると、源造は、わが意を得たりというように、

「いやあ、馬鹿でかいばかりでしてな。むかしの宮様なり、財閥なりというものは、やたらに大きな家ばかり作りたがったらしいですな。いやもう、維持費ばかりかさんで仕方がありませんわ。わっはっはっは」

大きく豪傑笑いをして、ウイスキーをストレートのままぐっと一口に飲みほした。

「ところで、今日おいでを願いましたのは……」

源造はやおらテーブルの上に身をのり出して、

「実は倅の総一が、今度、先生の『悪魔の家』をプロデュースしたいと申すので、ぜひ一つ、映画化の御承諾を願いたいと思ひましてな」

「はあ、そりゃ結構ですよ。私の方には何の異存もありません。どうぞお使い下さい」

そろそろいい気持になっていた研三は、原作者の金額をきめることも忘れてしまつて、威勢よく答えた。

総一は軽く頭を下げ、それから、源造と何か眼くばせしていたが、源造は、やがて葉巻に火をつけて、

「早速の御承諾で、わが社としましても大変うれしいのですが、実は、先生にもう一つ、折入つてお願いがあるのですがな」

といい出した。

とうとう来たぞ——と研三は腹の中で思ひながら、源造の次の言葉を待った。

「先生は、神津恭介先生の御親友なんでしょう？」

「ええ、高等学校以来、お神酒徳利のような親友ですが、それが何か？」

「実はですな、先生の『悪魔の家』に、神津さんに出演していただきたいので……」

「えっ？」

「そういうわけで、先生から神津先生を説得してもらえませんかね」

「だって、神津さんは映画なんか……」

「いや、もちろん神津先生がずぶの素人なのはわかっています。しかし、私は前に一度、ある席で神津先生にお会いしたことがあるのですがな、あの方はなかなかの美男子だし、先生の作品の中の探偵役なら地でいけると、私はその時直感したのですよ。そら、『恐怖のサーカス』というアメリカ映画に、有名な探偵作家、しかも俳優としてはズブシロのミッキー・スプーンが主演して、成功をおさめている例もありますからな」

「お父さん、ミッキー・スプーンでしよう」

「ああ、そうか……ま、とにかくですな、探偵としては有名な神津先生が、スクリーンにあらわれて大活躍とくれば、先生の映画化は、大ヒット、話題作となることは間違いないです。それにわが社としては、もっと大きなことを考えているのですよ。二、三本出演していただいで、カメラ度胸がついたところで、近衛公爵一代記——その主役をやっていたくつもりなのですよ」

怪物といわれるだけあって、源造の眼のつけどころは、完全に研三の意表をついた。

めったなことでは驚かない松下研三も、あまり突飛な話でしばらく返事も出来なかった。  
「最近の女性は、神津先生のような、冷たく理智的な、鋭角的な感じのタイプに憧れているらしいことが、当社の調査の結果からもわかっていますので……」



そばから、総一口をそえた。

「神津先生も、親友の松下先生の映画になら、出演されるんじゃないですか。一つ、口説き落していただけませんか」

「しかし、そりゃあ……駄目ですなあ」

研三は完全に頭をかかえこんだ。あのはにかみ屋の、人間嫌いの、非社会的な神津恭介に映画に出る——などといったら、こっちの頭が狂ったのかと思われて、東大病院の神経科へ入院をすすめられるぐらいがおちなのだ。

「どうしてです？ 失礼ですが、ギヤラの方は十分出しますよ。それに、そうなれば、先生の方の原作料も、口説き料を含めまして……」

「ですがね、神津さんは探偵探偵といっても、本職は東大医学部の助教授ですからね。まあ、文化映画とか、せめて教育映画ぐらいになればともかく、いくら何でも、劇映画には……」

「大学の先生が劇映画に出てはいけないという法律はないでしょう。そういつては何ですが、大学の先生の月給というのは、案外安いものらしいじゃないですか。神津先生も映画に出て、これがヒットして、次々にシリーズ物に主演するということにでもなれば、自家用車の一台や二台は間違いないというものですよ」

「そりゃ、そうかも知れませんが……どんなに僕が話してみても、やっぱり、うんとはいわないでしようね」

松下研三はすっかり閉口してしまった。

「先生、そう頭から駄目だと決めてかからないで、とにかく一応当って見て下さいよ。私は、一心